
なくした時間

山本 梓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なくした時間

【Nコード】

N6741K

【作者名】

山本 梓

【あらすじ】

大学生の主人公。高校生からの付き合いの彼女とのありふれた生活が、あることをきっかけに昔の約束を思い出す。

その約束は、自分が小さいときにしたある約束だった。

その約束を果たすために、いろいろな手をこうじるが、詳細まで鮮明に思い出せずそんななか、雨が降り、全てを思い出す。

青春

冷たい雨が僕の顔に降り注いでいた。

体が妙に冷たく、硬いものに触れていた。

僕は急がなくてはいけない。

…約束を果たすために…。

取り留めて何も特徴がない町、その一言ですんでしまうような、本当に何もない町で僕は育った。ひとつだけ自慢できることは、海が近いこと。おかげでテレビのニュースみたいに渋滞の中、車の中で貴重な時間を費やすことなく思い切り海で青春できるという点だ。そんな事が僕にはとても大切で僕はこの町が好きだった。

「いつもがんばってるね」

声をかけてきたのは、陸上部の亜紀だった。どの学校でも見られるであろう放課後の部活動。その中の些細な会話が僕たちの始まりだった。

「声が大きいからね。本人は適当に合わせてるつもりなんだけど・・・。周りの人にはいいアピールになるみたいで、先生にまで勘違いされた結果、レギュラーに大抜擢。こんな決まり方でいいのかな。」

僕は蛇口から顔を上げて自嘲気味に答えた。

「そうかしら？もしそうなら私もだまされてるのね。私も今度の大会にかけて猛練習してるけど、どうやら今回も無理みたい。」

「変なものだよな。声がでかいってだけで試合に出られるのに、一生懸命練習しても選手に選ばれないなんて、世の中平等ではないよな。」

「・・・そうかもしれないね。いけない、先生がこっち見てる。戻らないと。まだ諦めるわけにはいかないんだ。」

そういうと彼女はトラックに戻っていった。彼女は陸上部。短距離走の選手であった。特別な会話ではなかったのだが、それからお互いがお互いをなんとなく気にし始めたのだろう。教室で、廊下で、グラウンドで会えば一言二言他愛もない会話を交わしたことが僕たちの始まりだった。それから付き合い始めるまでにそんなに時間はかからなかった。

亜紀は良く笑う子だった。

思いつく顔といえば、まず笑顔を思い出す。本当に些細なことで笑うので、一度真剣に聞いてしまったことがあったが、やはりそのときも笑われてしまった。

その笑顔を見るたびに僕はとても嬉しかった。

・・・・・・どこか懐かしいような、新鮮なような。

僕が地元の大学に進学したころ、ようやくこの町にもビデオレンタルショップができた。映画が好きだった僕はそれまで、映画館のある町まで電車で通わなくてはいけなかったからとてもうれしかった。

もちろん、レンタルなので、どうしても早く見たい作品がある場合は変わらず町まで見に行かなくてはいけなかったけど。

「いつまでながめてるの？」

少し考えていたら声が聞こえた。

「わかってるよ。今これにしようか考えてたんじゃないか。」

僕は、少しだるそうに立ち上がる。

「せっかくなんだから、面白いもの見たほうがいいだろう？」

「はいはいそうね、私が映画好きなら喜んでるところだけどね。」

亜紀はいい加減に飽きてきたみたいだった。そもそも今日は会う予定ではないのになんて自分勝手なやつだ。

「いつも思ってたんだけど、何でお店に来てから悩むわけ？借りたいものがあるならすぐすむことじゃない？」

「別にこれを見なくては気がすまないって作品を借りに来てるのではないから…」

僕は言いかけて途中でやめてしまった。そもそも僕は話すのが得意ではないし、別に話す必要もないことは特別話したりはしないよ

うな性格だから。

「？見たいものがあるわけではないのにわざわざお店に来るわけ？
せっかくこうして久しぶりに会いに来たのに、そんな大事な用事に
つき合わせてくれてありがとうございます。」

彼女のそんな皮肉を、聞こえていないふりをしてレジへ向かう。
僕が映画を好きなのは、別に俳優の誰が好きとかではないのだから、
何を見たいというのはそんなに思わない。アクションものやラブロ
マンス、パロディーでも何でも良いのだ。大切なことはそんなこと
ではなく、その映画は何を伝えてくれるのかということだ。

僕はあるときからとても自分の意思を伝達するのが苦手になって
しまった。そのおかげで何かとトラブルを引き起こしたりしてしま
う。彼女との生活の中でもたびたび僕はそのせいでいやな思いをさ
せているみたいだ。

だから僕はいつのころからか、時間があれば映画を見たり本を読
んだりするようになった。他人の作ったものに触れれば、少しはこ
んな性格も変わるのではないか、怒ったり笑ったり泣いたりするこ
ういうことを相手にストレートに伝えられるようになるのではないか
という、とても根拠のない理由だけだ。

店を出たらまぶしいぐらいの日差しだ。

「せっかくだから海でも行かない？」

その誘いを断る理由もないので海に向かった。海に入るにはまだ
早い、それでも夏を待ちきれない人がいるらしく、何人かの海水

浴客がいて、みなこれから始まる夏を楽しみにしているようであった。

夕立が来るかな。

確かにいい天気だけど、海の方こうに少し濃い感じの入道雲が見える。夏の空の青と海の深い青を背景に見るとその入道雲まで綺麗に感じる。

いつのころからか、雨が好きだった。理由があるのかどうかかわらない。雨が降るだけで何かを期待してしまう。期待してしまう？

僕は夢を見る。人間なら誰しも夢を見るだろう。レム睡眠とノンレム睡眠が繰り返される限りは、誰もが夢を見る。夢を見ないといっている人は残念ながら忘れてしまっているだけなのだと何かの本で読んだことがある。

その夢がとても僕には不思議なものなのだ。あれは何歳ぐらいだろう？小学生なのは間違いなかった。

見たこともない学校の校庭で、見たこともない人たちと一緒に遊んでいる。見たことがない？記憶にない？どちらにしろ、そこがどこで、一緒にいるのは誰なのかわかるはずもなかった。

夢の話が続けよう。

その夢は、大筋はほぼ決まっていた。どの遊具を使ってどのような

に遊ぶなどは日によって違ったが、結局行き着く先は二通りしかなかった。二通りといっても本当はそれぞれがつながっているのかもしれないが、残念ながらそれがひとつの物語となっていた夢を見たことがない。・・・いや、覚えていない。

昼間から遊んでいた僕たちは、いつの間にか夜を迎える。そこでみな帰るわけではなく場所を移動するとそこでは盛大に祭りが行われている。すずめの涙ほどのお金をみんなで持ち寄り、売店で何を買うか吟味する。わたあめ、りんご飴、焼きそばなどなど。（型抜きはみなでできないという理由で却下されてしまうのがちよつと悲しい。）

最後の最後でみな意見が一致するのは花火だった。少ない花火をみんなで分け合い、線香花火が余ってしまう。僕はみんなが帰った後、それに一人で火をつける。いつの間にか周りの音がなくなり、線香花火の小さく、でも確かな音が僕の耳に聞こえる。

そこで目が覚める。

もちろん、毎晩その夢を見るわけではないが、頻度的には間違はなくダントツで飛びぬけていると思う。夢占いなど興味のない僕は、あまり気にすることはなかったがそれでもときどきはその意味についていろいろ考えるときもあった。

「やっぱり海はいいよね。青春で感じがする。」

亜紀は波打ち際に座りながら言った。

「ほら？ 高校生のときは私達、部活で青春をつぶしたじゃない？ 今更だけどこういうのって青春で感じがする。あんなに日差しが憎くて毎日ふらふらしながら練習していたときは夏なんて大嫌いだった

のに、今はこうしていると夏って本当にいい季節だなんて思うんだ。」

「まだちょっと美白にはなりきれていないけどね。」

僕はボソツとつぶやいたが、彼女は気にしていないみたいだった。波に消されないように何か数字を一生懸命書いているが、波打ち際なのでどうしても消されてしまうみたいだった。高校生の頃はショートカットで色黒だった亜紀だが、引退をしたときに決意したらしく髪の毛を伸ばしていた。今では両肩に届きそうだ。僕は亜紀のその真っ黒で艶やかな髪が大好きだったし、彼女もそれを知っていてパーマをかけたり染めたりってことはなかった。恐らく、高校の同級生が今彼女を見てもなかなか誰なのか判別しないのではないかな？と思う。もちろん中身はまだまだあの頃と同じで、活発で言いたい事をついもらしてしまふままだが。

僕と亜紀が付き合うようになったのは、高校生のときの僕の最後の大会の後だった。残念ながら地域で最弱のチームはやはり最後の試合でもあっけなく負けてしまった。後半、奇跡的に相手ゴール前の混戦で僕が蹴ったボールが得点になったが、スコアは1－3。高校三年間で公式戦で勝利を飾ることはなかった。そんな試合を彼女は見ていたらしい。最後の先生の話を聞いたあとにその場で泣き崩れていたときの話を今でも亜紀は僕にする。いい加減忘れてほしいがきつと、彼女はまだまだ僕を苛めるときにはこの話題を持ち出すだろう。

そんな僕を見て、今まで同級生という視点だったものがいきなり恋愛対象になったらしい。そこからは積極的な亜紀のペースで物事は進んでいった。もちろん、僕の彼女に対する気持ちは実はもっと前から密かに魅かれていたのでそれを断る理由なんてなかった。それから公認の二人となり、何をするにも一緒だった。もちろんこ

れからも一緒のはずだろう。

小さい頃って

たまに亜紀は僕にこんな質問をする。

「涼って、どんな小学生だったの？こっちに引っ越してくる前。」

僕は転校生だった。小学校の高学年に上がるときに父親の地元であるこの町に引っ越してきた。そのことで両親は少し僕に対して申し訳ないという気持ちがあるらしいが、僕は別になんとも思っていない。むしろ、気にする必要はないといつも言っていた。

亜紀のこの質問は僕をとて困らせた。写真を見せてとせがまれたことがあったが、写真は一枚もない。あることをきっかけに、僕が全て捨ててしまったのだ。

「どんなんて・・・今とそんなに変わらないと思うけど？まあ、小さかったからうるさかったりしただろうけど。でも、顔は変わらないって親は言ってるよ。」

実は、僕もよくわかっていない。小さいときの僕なんて自分で思い出せなかった。だから、亜紀のこの質問が出たときはかならずこう言うてごまかしている。

「今と変わらないって、そんなにひねくれた小学生みたことないよ。」

亜紀は笑う。そして、それ以上は聞いてこない。

本当のことを言うと、僕は本当に小さい頃の自分を覚えていなかった。引っ越してきたばかりのときはそうでもなかったのだが、僕は小学年生のときに事故にあった。幸い命にかかわるほどの事故で

はなかったが、前後の記憶があいまいになりしばらくはうまく話すことができなくなっていた。そのときの医者の話では、事故による強い衝撃で少し脳がビクリしたのでしょう。検査をしても以上は見られないので、これから徐々に回復すると説明してくれた。今考えて見ると、小学生でもわかりやすいように言葉を選んでくれたのだろう。

それから無事退院したとき、前の学校の友達が電話をかけてきてくれた。ただ、僕はうまくしゃべれないし記憶があいまいだったため会話が続かなかった。そのとき相手が言った一言に僕は取り乱したらしい。受話器を投げつけ、自分の部屋をめちゃくちゃにしてしまった挙句、意識を失った。

それを見て母親は息子が死んだのだと勘違いをしたらしい。運ばれた病院で先生と口論があったと、何年かあとに笑い話として聞いた。本当がどうかかわからないが、それ以降僕は昔を思い出すことができなかったし、思い出そうとする気にもなれなかった。おそれと前後して僕は昔の写真を全て捨ててしまった。

つまり、今の僕には小学校高学年からの思い出しかない。少しつらいのは、僕が引っ越してくる前の話でみんなが盛り上がっているとき、僕は何も話すことがないってことだ。その時はだまってその会話が終わるのを待つしかない。そんな時僕は少し孤独を感じてしまう。自分はそのとき存在していなかったと同じなのだと悲観的になってしまうのだ。

まあ、亜紀に言わせるとただの悲劇のヒーロー気取りということらしい。昔つい僕がそう考えていることをもらしたことがあるのだが、亜紀はそういつて笑った。もちろんそれはただの嘲笑でないことは僕にもわかった。亜紀のこういう上手な笑いが僕は好きだった。亜紀はいろいろな笑い方を知っている。楽しいときに笑い、悲

しいときにもめげずに笑ってくれる。僕が何度か彼女を泣かせたときも彼女は笑いながら泣いた。僕は彼女の笑顔に何度救われたかわからない。中学・高校・大学と、付き合い方はかわったが彼女の笑顔の素晴らしさは少しもかわらない。

約束変更?!

前々から約束していた旅行。ある程度時間が自由になって自分で稼ぐことが出来るようになったら、二人で旅行に行こうと亜紀は僕に言っていた。まあ、大学生になったのだしアルバイトをすれば旅行代は稼げるし親もそこまでうるさく言わないだろうから僕は何も考えずに了解と答えた。ただ、実際にどこへ行くのか、いつ行くのか、となると僕はいつも話をそらしていた。

「とりあえずごまかそうとして返事してるでしょ？もう何度も約束してるのに全然実行しようとしてないし。」
いい加減我慢できないといった感じで亜紀は僕にこう言った。

「というわけで、今回なんと宿を取ってしまいました。言っても近くだし、1泊だからあまりのんびり出来ないけどね。もちろん、和室に布団が二組並びますからね。」

どうやら亜紀はすでに旅行会社に連絡をして、近場ながら温泉旅館の予約を取ったらしい。最近やけに旅行雑誌を見ていると思ったらこうきたか。

「いきなり言われても、僕だって一応予定があるんですけど？」
僕はなんとかその旅行を回避しようとしたが

「7月25日から26日って確かアルバイトもないし、もちろん大暑も夏休みよね？だって、25日は私と会う約束したでしょ？」

やられた。その日はちょっとおしゃれな店に行きたいと言うことでアルバイトを入れなかったのだ。まさか、食事のデートの約束がい

つの間にかこんな約束になるとは僕も思わなかった。

「どこへ行くの？あまり遠いと移動にばかり時間とられるし、何も出来ない気がするけど？？」

「それは当日のお楽しみね。ただ、あまり遠くじゃないことは確かよ？いろいろ探索しようね」

亜紀はとても楽しそうにそういった。

約束の日まであと2週間。僕は喜んでいいのかわからないままその日を待つしかないみたいだ。

出発

楽しいことを待つ時間とは結構長く感じるもので。そう、なんだかんだ言って僕も旅行を楽しみにしていた。行き先は知らされていないが必要なものを準備する時間はやはり楽しい。

考えてみれば旅行なんて何年ぶりだろう。引っ越す前は年に一度のペースで一泊の家族旅行があったのだが、それ以降は修学旅行ぐらいしかまともな遠出はしていないことに気がついた。あの時は夜の話が楽しすぎて案の定寝不足になり、どこを観光したのか何を研修したのか思い出せないくらいだ。あの時は誰が好きなのかとか誰と誰が付き合っているのかとかくだらない話で夜明けまでよくおきていられたなと思う。見回りの先生も巻き込んで怪談とか今考えると笑ってしまうようなことがたくさんあった。

『そう言えば、結局行き先はどこなの??』

出発日を来週に控えて僕はそう聞いた。何しろ近場に行くとは言え何も知らされていないのだからさすがにそろそろどの辺りなのかを聞かなければ荷造りを完成させることは出来ないと思った。山なのだろうか?それとも海??まさか隣町ってことはないだろうけど??

「本当は当日まで言いたくなかったんだけど、しょうがない、教えてあげましょう。」

なんでそんなに上から目線なのだ?とは言わずにおいた。そんなことを言って機嫌をそこねたら恐らく教えてもらえないだろうというのはこれまで付き合ってきた中での経験だ。

「涼の昔住んでいたところ。ちょっと遠いかもしれないけど、一泊だし午前中に出発すればお昼ごろ着くでしょ？案内してほしいな。」

亜紀の性格を知り尽くしていた気でいたが、さすがにこれは思いつかなかった。よくもまあそんなことを思いつくものだと関心もしたが。

『午前中に出発って、何時間かかるか知っているのでしょうか？おそらく、朝食前に出発しないとお昼には着きませんけど？？それと確認だけど、電車ですよ？？』

車の運転が嫌いなわけではないが、旅行に関して僕は持論がある。旅行とは息抜き、気分転換に重きを置くべきで、旅行のために疲れたりって言うのがどうしても考えられない。旅行から帰ってきて、「やっぱり家が一番だよね。」なんて言うのは間違えているとは思えないのだ。

「案内してって言ったよね？電車やバスは貴方の言ったところへ行ってくれるのかしら？車掌さんに『あ、そこ曲がってください』って言えるのならかまわないけど？？」

どうやら車で行くことに決定しているみたいだ。

『…ですよ。車は行きたいところへいけるし、時間も気にしないでもいいですね。うっかりしてましたよ。』

長丁場になりそうだ。前日は早めに寝て体調管理をしっかりとっていないといけなさそうだ。

『でも、恐らく案内はあまり出来ないと思うよ？前にも言ったけど、僕が住んでいたのは小学校低学年のころまでだし、君は信じていないけど本当にあまりその頃のことを覚えていないんだ。通っていた学校ぐらいいしか案内できないと思うけど？』

「それでもいいよ。涼の小学校の姿を少しでも想像できるようにこの計画を立てましたから。どんな小学生だったんだろうね。」

亜紀が言うには、今思い出せなくても街並みを見れば何か思い出すでしょ？とのことだった。全然そう思わないが、ここは好きにさせておこう。それに、覚えていないとは言ってもやはり懐かしいと思える場所なのだ。小さい頃の僕は確実にそこで小学生をやっていたのだし。

『いくらなんでもこの時間は早過ぎないでしょうか？世間ではまだ朝ごはんを食べている人も少ない時間ですよ？』

「一応夏休み期間だし、何が起きるかわからないでしょ？お昼には宿にチェックインできるんだから文句言わないの。さ、安全運転をお願いします。」

：6時前の出発だった。小学生だってまだラジオ体操にも行っていないし、カブトムシ取りに命をかける小学生だってまだ寝ている

はずだ。なんだってこんな時間に出発しないといけないのだろうと、眠い目をこすりながらそれでも出発した。一応言っておくけど、亜紀は車の運転ができない。いや、できるのだがしようとしれない。亜紀が車を運転しているのを最後に見たのはいつだったろう。…おそらく、僕が一足先に卒業した教習所で見かけたあの運転だろう。

どうやって行くかは一応地図もあるし両親に道を聞いたりしておいたので恐らく問題はないだろう。今から出発すればお昼少し前にはつけるはずだ。どうやら亜紀は旅館のご飯よりも下調べした店でのランチを楽しみにしているらしい。こういうことはきちんとしているのがなんとも亜紀らしいと言うか女性らしいと言うか。

『何となくこの辺りの風景は覚えているような気がするんだよね。ほら、そこのお店とか。』

「よく見てる？ 開店セールって意味わかる？ 適当にもほどがあるわよ？」

あれ？ 勘違い？ 確かに見たことがあるような気がしたのだが。

『車の運転でなんでこんなにあくびがでるんだろう。ほら、あの人もあくびしてる。』

「ほお、ね。」

君もですね。思わず二人して自然と笑ってしまった。車での会話は尽きることはないけど、やはりお互い無言になる時間はある。そうなると普段より早起きしたこの身にはとてもつらいので音楽をかけるのだが、しばらくすると亜紀が不機嫌になる。二人でいるのになぜ音楽を聴くのか？ もっと二人で出来ることをしなさいとよく怒

られるのだが、さすがに何時間も話し続けるのは厳しい。こんなことと言えないが、亜紀が寝てしまうと少し僕も気が楽になるのだが残念ながらその気はないようだ。

『ちよつと休憩入れようか。一度道筋も確認しておきたいし亜紀も疲れたろう?』

「待ってました。ちよつと前から我慢してたのよね。」

『トイレ行きたいときは言えればいいのに。』

「レディはそんなこと恥ずかしくていえないの。で、どこで休憩? いい加減限界でシートの安全が保障できなくなりつつありますけど?」

『あれ? レディはどこへ行った?』

など軽く漫才をしながらコンビニエンスストアで休憩することにした。こんなときコンビには便利だと思う。もちろん、トイレだけ借りるのは気がひけるのだが。

どうやらもうすぐで僕が育った町に入りそうだった。地図を見る限りではこの辺りも何度か自転車で遠乗りしていたはずなのだがどうにも思い出せない。いや、おそらくあの当時はここにコンビニなんてなかったはずだ。うん、きっとそうだろう。

「何独り言いつてるの? 何か食べ物か飲み物はある?」

口に出すとまた呆れられそうなので僕はごまかしつつコーラをお願いした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6741k/>

なくした時間

2011年10月6日23時44分発行